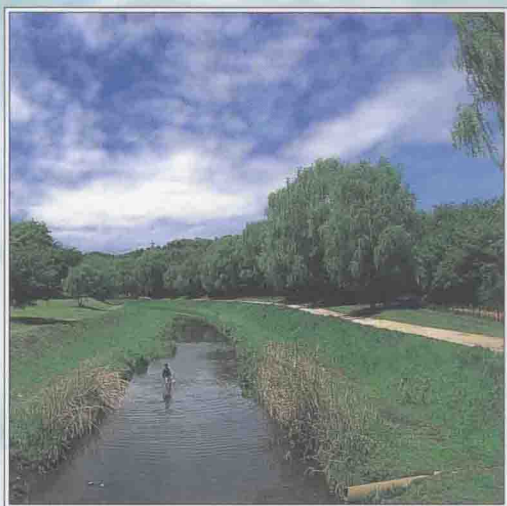




河川にもっと自由を

流れゆく時代と水

高橋 裕／著



山海堂

◇◇◇◇◇

河川にもっと自由を

流れゆく時代と水

高橋 裕／著

山海堂

河川にもっと自由を

[検印省略]

1998 年 8 月 15 日 第 1 版第 1 刷発行

[定価はカバーに
表示してあります]

著 者 高橋 裕

発行者 石川悌二

発行所 株式会社 山 海 堂

郵便番号 113-8430

東京都文京区本郷 5-5-18

電話 03(3816)1617 番

FAX 03(3816)1619 番

振替 00140-3-194982

印刷所 教文堂

Printed in Japan

落丁本、乱丁本はお取り替えいたします。

© 1998

ISBN 4-381-01226-7 C 0051

はじめに

この三月、私は芝浦工業大学を定年退職した。一九五五年、東京大学工学部土木工学科の専任講師に任ぜられてから、東京大学定年までの三十二年、芝浦工業大学での十一年、合わせて四十三年の大学教師の間、一貫して河川工学にかかわる調査、研究、教育に携わってきた。

その間の社会の変転は目まぐるしく、川への人々の考え、期待、要望、さらには河川観も大きく変化したと感じている。

当然、河川行政も、河川工学の方向や内容、姿勢にも著しい変化がみられる。私にとっての区切りの時期に当たり、一九五七年から九八年までの約四十年間に河川に関して執筆した約七〇の短編を発表順に再録してここに一冊にまとめることとした。この大部分は、現在私が会長を務めている日本河川開発調査会の機関誌『にほんのかわ』（季刊）の巻頭に一九八〇年から九七年まで執筆した「川の声」からの転載である。もっとも、『にほんのかわ』に掲載されたのは、九六年十月号の『平常時の川』までで、その後の三編は、『にほんのかわ』の編集方針が変わっ

たため、同誌には掲載されず、本書で初めて世に触れることとなった。

その他の短編は、新聞などに掲載された論説・随想の類であり、発表時点における河川や水の話題について解説、もしくは私見を述べた原稿である。これらの発表年月と掲載誌は巻末にリストアップしてあるので、それぞれの時代背景などを想像しながらご参照いただければ幸いである。

これらを現時点で読み返してみると、当たり前のことを述べているに過ぎなかったり、いささかポイントが外れているような意見もあるように思われる。しかし、本人にしてみると、その時点時点では斬新だと思ったり、河川関係者に訴えたかった考えである。この半世紀弱の間、自分としては河川観は変わらなかったつもりではあったが、数十年前に書いた文を読むと、齢を重ねたこともあり、感覚やニュアンスの変化を感じざるを得ない。最近書いた見解も、これから半世紀後には、陳腐なものになるであろう。ただ、河川にとっても激動のこの四十余年間の、自らの記録を辿り自省の糧にしたいと思う。

わたしが東京大学に入学した一九四七年は敗戦から二年目、世情混迷のころ、カスリーン台風により利根川堤防が切れ、氾濫流は東京都東部まで水没させる大水害となった。そのころは毎年のように水魔が日本列島を襲い、水害を何とか軽減させることが河川関係者のみならず世を挙げての最大関心事のひとつであった。やがて高度成長期の都市化時代には、急激に都市人

口が増加し、都市や工業の水不足が深刻となった。水資源の急速な開発が急務であった。これらの対策として精力的に行われた河川事業によって、河川の人工化が進み、それによる環境悪化への対策が重大化してきた。

思えば、日本の河川をめぐる慌ただし半世紀の変転は、この間の日本社会史、経済史の変動の現れとみることができよう。その間に身を処して多くのことを学ばせていただいた河川に感謝しつつ、来し方を振り返り、将来を視る心を研ぎ澄ましたいと思う。

一九九八年七月一日

高橋 裕

目次

はじめに

自然としての河川を相手に 2

開発と災害 6

川に標札を立てよう 10

川とともに暮らそう 14

本家の災害・分家の災害 16

河道の背後に流域がある 21

弱いのは長良川だけではない 28

中国への初めての旅 31

湯水の如く使うな 36

水害と川と子供たちの眼	40
堤防決壊を考える	45
より良い治水史を	48
現場へ出よう	51
八二年長崎水害と眼鏡橋	54
川は文化の顔	57
水制への関心を	61
常に総合治水の推進を	65
水害訴訟の影響を考える	68
川と相撲	71
三峽ダム計画の課題	74
河川のより良きPRを	77
地図を持たない、読めない大学生	80
河川と民衆をつなぐもの	83
陽の目を浴びない法案	87
大同江の水辺空間	90

治水・水利史の意義認識を 93

大井川の復流の意義 96

数式のない工学論文 99

東アジアにおける日本 102

日本人と水 105

クワイ川の「戦場にかける橋」 109

伊勢湾台風から三〇年 112

水辺空間整備は庭園づくりではない 115

高齢化と国際化社会 119

IHD/IHP二五周年シンポ参加 122

河川工学の原点を見直そう 125

堤防は文化 128

雨水を漏らす下水道 130

自然との共生をめざす河川事業 132

リゾートと水資源 134

幸田文さんを偲ぶ 136

二十一世紀の土木技術者 139

カタカナ英語の氾濫 145

学生が興味を持つ講義を 148

モーツァルト・ドゴール・宮本武之輔 151

本流にダムのない唯一の川 154

多自然型河川工法の流行 158

壮大な河川哲学を 161

穴太積護岸 164

多摩川水害裁判終わる 169

都市の医師 172

タテ社会をヨコに歩く 175

地盤沈下の未然防止を 178

新たな水利秩序の確立に向けて 181

環境ブームを考える 184

河川技術者伝記ブーム(?) 188

国際化への対応は日本を知ることから 191

日本橋川と高速道路 194

水の危機管理 198

自然と人間の共生 201

河川法公布から百年 204

司馬遼太郎さんを悼む 208

世界水会議の誕生 211

平常時の川 214

河川法改正後の水資源計画 217

世界に誇れる東京の景観復活を 220

利根川破堤から五〇年 222

河川にもっと自由を 227

水資源計画に新たな手法を 230

二十一世紀に向けて自然共生の哲学を 234

おわりに

転載文献一覧

本文写真の説明

野川 (P. 9、P. 43、P. 187、P. 239)／清流の街・郡上八幡 (P. 38)／
東京の川・隅田川と荒川放水路 (P. 59)／富士川の聖牛 (P. 63)／街
中の清流・滋賀県米原町西星ヶ井 (P. 85)／ビオトープへ再度改修さ
れるいたち川・横浜市〔1993〕 (P. 117)／白神山地・岩木川・門川源
流 (P. 157)／著者宅・穴生積石垣 (P. 167)／空のない神田川・日本
橋 (P. 196)／利根川 (P. 205)／カスリーン台風決壊跡の碑・利根川
右岸 (P. 223)／田園は天然のダム (P. 233)

河川にもつと自由を

自然としての河川を相手に

戦後、特に一九五三（昭和二十八）年までは毎年のように日本各地に大水害が起こり、当時の苦しかった日本経済をさらに傷めつけた。また、洪水を防ぐことと絡み合せて、至る所で河川の総合開発が喧伝けんでんされた。そのうちでも特に電源開発は、日本におけるエネルギー問題や補障問題とともに、ジャーナリズムの面でもかなり広く取り上げられている。しかし、壮大なダム工事が近代人に魅力的ではあっても、本来の河の技術、河の科学については一般には知られていないし、理解され難いものらしい。私自身、河を見に行く機会が多いが、その際、専門に近い人々からさえ、「一体河のどこを見るんですか」という類の質問を受けることは珍しくない始末だ。その原因の一半は、工学の中でも河川工学が特に自然現象を直接的に取り扱う点にもあるようである。

いわゆる総合開発では、ダム建設が工事の中心となることが多い。そこでダムが竣工すればそれで開発事業は終わり、研究も終わったと思う人が多いようだ。しかし、私たちの立場からいえば、問題はそれから始まるといっても過言ではない。ダムの水位操作に当たっては、雨量

と流出との関係に関する蓄積された資料や研究が必要であるのみならず、さらに雨量その他の観測を絶えず継続していかねばならない。

ダムを造れば上流貯水池には土砂が堆積してくる。その状況を常に注意して調べ、対策も忘れてはならない。一般にはダムのすぐ下流では河床は洗掘されて、土砂は下流へと運ばれ、中下流方面の河床上昇や、河筋の乱れる原因となりやすい。不規則な土砂移動により河床が上昇したり低下したりすると、河道だけの変動問題に止まらない。一例を示せば、これに依存している用排水関係にも、今までとは違った条件を強いることとなり、新たな難問を提供する場合が少なくない。ダムを造れば、河の流れ、特に洪水時の流れ方が以前とは大分変わってくる。したがって、そのことが河床土砂の動き方にも影響してくると考えられる。この場合、ダムはわかりやすくするために、一例として挙げたに過ぎず、実際はもっとさまざまな要因が複雑に絡み合っている。

とにかく、河床の土砂がどのような原因でどんな具合に動くか、洪水がどのように流れるかは、なかなか公式的には解けず、私たちにとって重要な研究課題の一つとなっている。これらさまざまな課題は元をたどっていくと、結局、雨量と流出との関係の解明へと集約されるようである。私たちはこの部門の学門を水文学（すいもんハイドロロジー）と呼んでおり、諸外国でもこれに関する研究への認識が高まり、最近とみに活発になってきている。

一つの実例を挙げよう。建設省土木研究所では一九四八（昭和二十三）年以来、利根川の一支流神流川^{かんな}において、基礎的な水文調査を行っている。この流域に、約四十か所の雨量観測所と、四か所の流量観測所を置き、雨量と流出との関係について、絶えず基本的観測を継続している。この種の仕事では、観測に切れ目を置かないことが一つの重要なことであるが、それには人知れぬ根気と努力が必要である。しかも、派手な成果は直ちには実らない。しかし、本当はこのような地味な研究の成果の積み重ねの上にこそ初めて合理的計画を立てることができ
る。

総合開発というような仕事も、ただ表面上の点のみTVA（テネシー川流域公社）などのまねをしても、成果を期待することは無理な話である。自然界をよく理解した上での調査に基づいた時に、現実的計画というにふさわしい、地に着いたプランが立てられるであろう。この場合、対象が河川という自然現象である以上、自然をいかに理解するかが、これらの研究の第一歩であるとは私は考えている。

このような河の問題は、規模の大きさやあらわれ方は違うとはいえ、人類の歴史とともに始まったとさえいえよう。事実、人間の技術的活動のうちで、河川工事は恐らく最も古い歴史を持つている。しかも、今後とも河川技術者は、同じような問題を永遠に追いつけるに違いない。このように長い歴史を持ち、自然を相手としていたために、人々にはいかにも進歩の遅い技術

として映ずるかも知れない。確かにそれは、最近の極度に機械化され、あるいは理論化された工学と比べる場合、目をそばだたせるものではなく、泥臭い感じがする。しかし、河川技術に携わる者はむしろその泥臭さの中に私たちの生活との本能的なつながりを感じ、愛着を抱いている。生活と最も身近な技術ともいえるだろう。そのつながりが、私たちを育てているこの土地を、より良く住みよくしようという意欲へと発展するとき、私たちはこの学問と技術とがしっかりと融け合ってくるように感じる。

(一九五七年六月)